

Ｊ・デュウイ『哲学の改造』増補版「序論」試訳（三）

著者	佐々木 健
雑誌名	星薬科大学一般教育論集
号	6
ページ	13-18
発行年	1988
URL	http://id.nii.ac.jp/1240/00000165/

J・デュウイ『哲学の改造』増補版「序論」試訳（三）

佐々木 健

人間界の現状に関して適切な意味を獲得し、自分が喪失しつつある活力を回復するために、哲学は何を必要としているか、についての著者の見解は以上の通りであるが、この見解は、科学が人間の活動と利害状況のなかに入りこんでくる事態は破壊的な側面をもつ、ということを否定しようとするものではない。それどころか実に、哲学において要請される改造に関してここに提示した見解の出立点は、科学は旧来のものに侵入しこれと敵対するにいたるのであって、この参入こそ、人間が現在置かれている境位をひき起こすのにあずかって力がある主要な要因である、という点にある。さらにまた、科学こそが責任を負うべき有罪の当事者であるとする非難攻撃は科学のもつ破壊面（のみ）を強調し、科学の成果として生じた人間にとっての多大な恩恵を等閑視している点でひどく一面的であるのに対して、「著者の見解において」主張されているのは、人間にとっての利益が損失を凌駕していることを示そうと目論んで損益の対照表を作成したところで、そのことによって問題は処理しえない、ということなのである。

事実上の問題ははるかに単純である。科学に対して現在行われている非難攻撃が立脚している前提は、科学が入りこんで（旧来の）秩序を混乱させるためにひき起こされる諸帰結の価値を判定するのにとるべき十全な、それどころか実

に最終的な規準は、制度化された信仰をも含めての旧来の制度上の慣習がこれを提供するのだ、ということである。この前提に固執する人たちは、「科学」には協働者があるために、われわれが置かれている危機的な状況が出来した、ということに留意することを一貫して拒んでいる。虚心坦懷に事実即してものをみる姿勢さえあれば容易に認められることであるが、科学は孤立して虚空のなかで作業を営むのではなく、近代科学勃興以前の時代に発展した制度上の状態——その時代に形成され、そのためおそらくは当時の状態に適合していた、精神的道徳的価値の諸原理に関する学的探究によっても修正されるにいたっていない状態——の内部で作用するのである。

科学を「社会的環境から」切り離してそれだけ見る見方がどれだけ欠陥をもち、そこからいかなる歪曲が生じるか、は一つの単純な事例をとってみれば明白である。原子の核分裂を利用して破壊的な用に供すること（「は間違ひである」という論法）が、科学に対する非難攻撃の常套手段となっている。しかしその際、否定されているのも同然であるほど無視されていることは、この破壊的な帰結は一つの戦争において生じたばかりでなく、戦争（そのもの）の存在ゆえに生じたという点、そして一つの制度としての戦争は、科学的な探究にいささかでも似かよったものが人間界の場面に登場するのに何千年も先んじて存していたという点である。この場合に、破壊的な諸帰結が以前から存在する制度上の諸条件に直接起因することはあまりにも明白であって、議論の余地がないほどである。もとよりこのことは、場所と時代とを問わず、そうであった、ということをも証明するものではない。しかしそのことは確かに、現在ひろまっている無責任でみさかいのない独断的な臆見におちいらないよう、われわれに警告している。実践および理論の両方の意味における道徳が形式を整え内容をそなえるにいたったときの非科学的な諸条件を想起するように、われわれに忠告を与える。否定することはできないのに、一貫して無視されてきた事実に注意を喚起する（著者の）目論みは、科学研究者の営為を全般にわたって、あるいは個々の特殊な場合について、正当化しようとする点にあるのではない。こうしたことは（ここでの議論と）まったく

無関係であり、それゆえ無益でもある。そうではなく、知性の要求にとって際立って重要な意味をもつ一つの事実に注意を促そうというのである。科学的な探究は未熟な発展しかみていない。それは、人間にとっての関心事、利害状況の、そしてまた人間にかかわる事柄の、物理的、生理的な局面を超えていない。したがってそれは、偏った局部的な影響しか及ぼさず、しかもこの影響が誇張されている。科学が制度上の諸条件のなかに入りこみ、それが人間に対してもつ諸帰結を、制度上の諸条件が「価値的に」判定しようとするのであるが、当の諸条件そのものは、科学的と称するにあたいる探究をいまだうけていないのである。

こうした事態が哲学の現状と企てられるべき改造とに対してもつ関連がこの序論の主題である。直ちにこの主題に再度立ち入る前に、道徳の現状について若干述べておきたい。ここにいう「道徳」とは、正邪、善悪にかかわる実践上の社会的文化的事実と、現実の事態を概括し判定するうえでのとるべき諸々の目的、標準、原理に関する諸理論とを表示する語である。このことをまず記憶にとどめておいていただきたい。さて問題の単純な事実は、いかなる探究であれ、深く、かつ包括的に人間にかかわる事柄にたちいるものであるならば、いやおうなしに道徳という特殊な領域に入りこまずにはいられない、ということである。探究が意図するといなどにかかわりなく、また自覚していようがいまいが、そうなのである。人間文化を支配する基本的な利害状況、諸関心事、人間を行動へとかりたてる動因となる諸目標に関する考察には「価値」「判断」がつきまといわざるをえず、「科学的」なものとしての探究は価値と没交渉であるとの理由から、「社会学」理論がそうした考察の前にたじろぎ、そこからあとじさりするならば、その必然的な帰結として、人間にかかわる領域の探究はどんなに専門的技術をひけらかそうとも、表面的で比較的瑣末なことにかぎられることになる。しかし他方、もし探究が十全な意味で人間にかかわる事柄に批判的にたちいるうとするならば、またその場合には、探究は科学が勃興する以前に強固となった多数の偏見、伝統、および制度上の慣習につきあたる。というのは、先にふれた二様の意味での道徳

は、今日理解され実際に行われているような科学が勃興する以前の時代に形成されたがゆえに、科学以前のものと述べたところで、それは同語反復であって、発見もしくは推論の結果の宣明とはならないからである。そしてまた、人間にかかわる事柄の具体相が甚だしく変化してしまっているときに、非科学的な態度を持することは、現在の道徳——これまた先の兩様の意味での——を反科学的にするような仕方、道徳に関する探究の方法の形成に實質的に抵抗することになるのである。

もし知性上の立場、見解、あるいは哲学が「範疇」と呼んできたものがすでにして手許に存し、探究のための道具として役立つのであれば、問題は比較的単純であろう。しかしそうした道具が「既成のものとして」手許にあると想定することは、次のように想定することに等しい。すなわち、前科学的な状態にあった人間界にかかわる事柄、人間の関心事、利害状況、および諸目的を反映する發展段階の知性が、ますますもって、また大部分、新興科学から生じた結果であるような人間界の現状を十全に処理することができる、と想定するのに等しい。一言でいえば、成行きまかせ、不安定、不確実性の支配する現在の状態を存続せようと決心することなのである。以上述べてきたことが、本来意図している意味において理解されるならば、哲学における改造に関してここに提示される見解は、説得力をおびてこよう。ここで「著者が」とっている立場からすれば、改造はまさしく、現在の状況と境位の、深く、かつ包括的に人間にかかわる——すなわち精神的道徳的価値にかかわる——諸事象に関する探究を漸進的に嚮導する知性上の道具を開発し形成し、（文字通りの意味で）産出する営為以外のなものでもない。

同一の一般的な方向にむけてのいっそう進んだ諸段階に到達するのに、まずもって必要な第一歩は、次のことを承認することであろう。すなわち、事実在即していえば、人間界の現状がよきにつけあしきにつけ、また害悪になるにせよ利益になるにせよ、現にあるような相貌を呈しているのは、既述の通り、自然学、研究に起源をもつものが日常の通常・一般的

な生活様式に入りこんできたためである、ということをも、まずもって承認しなければならぬ。「科学」の方法と結論とはいつまでも「科学」の内部に閉じ込められたままではいけない。まるで科学が自己閉鎖的、自己始動的な独立した実体であるかのように想い描いている人たちでさえも、科学は実際において、いつまでもそのようなままではいけない、ということ否定することはできない。科学こそが人間にふりかかっている現在の災禍の根源であると主張する人たちは科学を一つの実体と観じているが、そのように観ることは理論のうえでの一箇の活物論的な神話である。いままで人間生活の現実的狀況のなかに深く、かつ広く入りこんできた科学は偏った部分的で不完全な科学なのである。物理的な条件に関して、そして（医学と公衆衛生の最近の発達にみられるように）ますますもって生理学的な条件に関しては、有効であっても、人間にとって至上の意義をもつ事柄——きわめて特徴的に、人間の、人間のための、人間による事柄——に関しては存在しないも同然である。人間が置かれている現在の境位を、どんな仕方であれ知性を働かせて見、かつ理解するならば、ひとは生活における異常な亀裂に必ずや気付くであろう。「既存の」道德の前科学的な性格をあらわにしめし、そうした道德を恒久化する諸力の働き（「が一方にあり」、いまだ偏って部分的で不完全である科学、したがって必然的に一面的な作用しか営まない科学によって突然、途方もなく加速度的に、かつ徹底的に広範囲にわたって、実際に規定され制約されている状況の諸力の働き（「が他方にあり、これら二つの働き」）の間の根本的な矛盾が先の亀裂をひき起こしている、ということに気付くであろう。

四

これまでの行論のなかで、哲学者として分類される特定の人間たちの業績に何回か言及してきた。西洋文化の構造と作用そのもののなかに情緒のうえでも、知性のうえでもしみついていた宇宙論・存在論の残滓を除去して地面の掃除を行う

道程で、これらの人たちが一七、一八、および一九世紀において達成した業績にふれたわけである。その際、天文学、（化学を含めての）物理学、および生理学を漸進的に変革した特殊的な探究に対する名譽が哲学者に帰属することが主張されたのではない。そうではなく、広く受け容れられた文化的環境があり、そしてこれまた広く受け容れられた習慣に弾みがつけば、科学者が業績をあげるための不可欠の前提条件となるような仕事を哲学者は遂行したのであって、このことが歴史的な事実問題として記録されたわけである。いま述べたことと哲学の改造との関連とあわせて、さらにここで付言しておくべきことは、次のことである。すなわち、その特殊な営みを遂行するなかで、科学者たちは一つの探究方法を案出したのであり、この方法は、哲学の任務に本来属するようなたぐいの定型化を許容し招来し、さらに要求しさえする〔理論的〕範型を提供しうるほど、包括的な範囲にわたり、それほど浸透性にとみ、それほどあまねく行きわたる力をそなえた普遍的な一つの方法であった、ということである。この方法は自己矯正的に作用し、成功から学ぶと同様に失敗からも学ぶ一つの認識方法である。この方法の核心は探究が發明と同一であることを発見したことにある。自然学の専門分化した、相対的に技術的な活動領域の内部では、新しいものを開示し古いものを捨て去る、この発見という仕事は当然のことと考えられている。ところが、どのような形態の知性の活動においても発見は同様の中心的な位置を占めているにもかかわらず、このことはけっして一般的に承認されていない。それどころか、自分自身の専門分化した作業領域においては、発見が占める中心的な位置を当然至極のことと考えている人たちがさえ、こと、「精神的」で「理念的」なものとして、そしてもっぱら精神的道德的価値にかかわるものとして別個に引き離されている事柄については、方法が占めるこの中心的位置を想い描くだけで衝撃をうける者が多い。